

皇女が身清めた施設か

東西105メートルの柱列跡

奈良・脇本遺跡

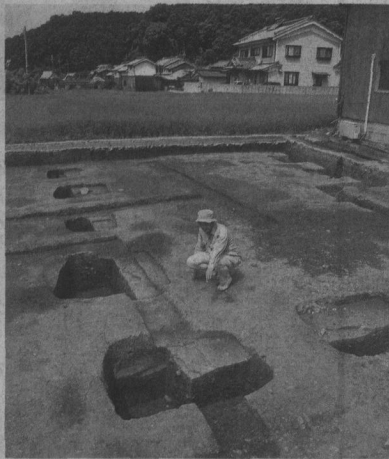
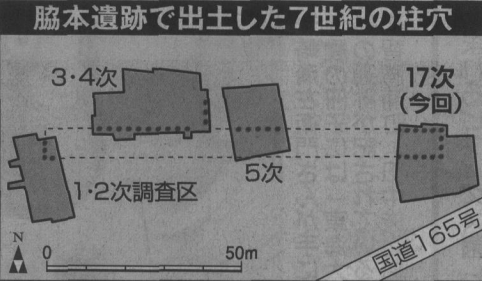
奈良県桜井市の脇本遺跡で7世紀の柱列跡が見つかり、県立橿原考古学研究所（橿考研）が17日、発表した。過去の調査と合わせ、柱列は東西105メートルにわたって2列に並んでいたと推定され、橿考研は「柵か建物か確定できないが、計画的で大規模な施設の存在が明らかとなった。大伯皇女（天

武天皇の娘）が伊勢神宮に仕える前に身を清めたこととされる泊瀬斎宮だった可能性が高まった」としている。今回の調査で東西12メートル、南北8メートルの「コ」の字形に柱穴14基を確認。柱の直径は35〜45センチと推定される。「磯城・磐余の諸宮調査会」による昭和59〜63年の1〜5次調査で確認された

7世紀後半の柱列跡と一直線につながり、柱列跡の北側にある現在の春日神社を中心に、約100メートル四方の古代の造成地の南面に建てられた柵か建物の可能性が想定できるという。

脇本遺跡周辺は雄略天皇（5世紀後半）の宮殿の伝承地で、天武2（673）年4月から約1年半、大伯皇女が滞在したと、日本書紀に記された泊瀬斎宮との関連も指摘されていた。

現地説明会は20日午前10時〜午後3時。近鉄大阪線大和朝倉駅徒歩15分。当日の問い合わせ先（☎080・43300・0664）。



見つかった柱列跡。奥の水田に向かって105メートル続くと推定される―奈良県桜井市の脇本遺跡（川西健士郎撮影）

前園実知雄・奈良芸術短大教授（考古学）の話「柱間の長さにはばらつきがあり、建物よりは柵だろう。泊瀬斎宮の可能性も含め、脇本遺跡が律令国家が誕生する7世紀後半も政権の重要施設だったことがより明らかになった」

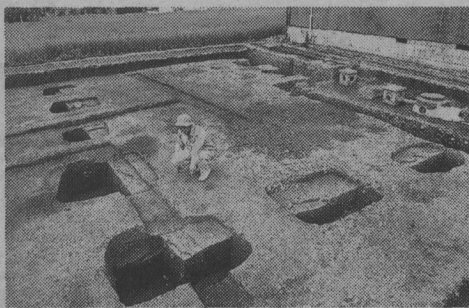
泊瀬斎宮の一部か

脇本遺跡 7世紀の柱穴列

（東西12竃、南北8竃）に並んでいた。

過去の調査で西側の3カ所で、同じく東西方向に伸びる同規模の柱穴列（7世紀後半）が出土しており、同時期のものとみられる。柱穴列は西側へ続き、二重の柵列か、東西方向の建物跡かは不明だが、柵とすれば西側の柱穴列と合わせて100竃を超す長大な規模になる。

一帯は5世紀に雄略天皇の「泊瀬朝倉宮」があったとされる地域。日本書紀は、673（天武2）年、大来皇女を伊勢神宮へ遣わす前に身を清めるため、泊瀬斎宮に住まわせた」と記す。前園実知雄・奈良芸術



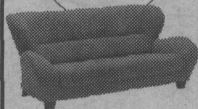
5竃の間隔でコの字形で計14基。1・95×2

脇本遺跡で見つかった柱穴列の一部。奥の水田の下に続きが延びているとみられ、今秋に調べ予定。脇井市脇本

短大教授（考古学）は「柵にバラツキがあるので、齋宮の一部かどうかは不明だが、何らかの重要な施設があったのは間違いない」と話す。現地説明会は20日午前10時〜午後3時。近鉄大和朝倉駅の北東約1キロで、市立朝倉小学校で受け付け。小雨決行。問い合わせは榎考研（0744・24・1101）へ。

奈良

カリモク家具
karimoku



国産家具

高木

橿原市八木町南都銀行隣り
TEL.0744-22-2372